翻訳

プラトン『パイドロス』
――哲学とレトリック――

W・イェーガー
村島義彦訳

最近の数百年を見渡して、プラトンの作品中で『パイドロス』ほど、判定のグラついた作品はなかった。シュライエルマッハーが『パイドロス』を、アカデメイアの学習プログラムだと考え、それゆえ、プラトンの初期著作であると判定して以来、この作品は長らく、プラトンの著作活動と教育方法の最終ゴールを把握する上での、当然の出発点と見られてきた。『パイドロス』には、著作・話し言葉・思想の三者関係をめぐる、プラトンの見解が短く要約されていて、それゆえこれは、プラトン哲学という大広間に入る前に誰もが経由すべき、入場門であった。『パイドロス』のソクラテスは、自身でもアイロニカルに語っているように、エロースをめぐる演説では〝ディテュランボス調の威勢よさ〟の虜となっている。[1] こうしたディテュランボス調は、この対話篇の成立がかなり早い時期であったのを物語る、何よりの徴候と見られている。すでに古代の批評家たちは、ここでのエロース演説の所式には、部分的に劣ったところ―あるいは「青臭い」ところ―が見られるとコメントしていた。この「青臭さ」はむろん、基本的には、生物学的意味でのそれ（＝若い人物がこれを書いた）でなく、絶対的な美的価値判断に基づくもの（＝これは若い人物の作品に近い）であり、つまりは〝溢れる過剰〟への有罪宣告であった。[2] とはいえこれは、のちに解釈し直されて、いまだ正しい釣り合いを欠いた、それゆえ著者が、本当に若い〝しるし〟であると考えられるようになった。この場合にはしかし、〝正しい釣り合いを欠く〟という所式的特徴が対話篇の全体でなく、エロース演説に限定されていること、プラトンが、この特徴をはっきりと、ソクラテスの置かれた例外的な精神状態の徴候だと口にしていたのが、見落とされている。にもかかわらず一般には、プラトンが、文学的営為のそもそもの初期に、著作活動一般と自らをどう関係づけていたか、より詳しくは、書かれた言葉が哲学にどうした価値をもっているかについて、かれ自身の説明を『パイドロス』から期待できるはずだ、と信じられていた。この点は、プラトンの著作活動の所式を理解する困難が、さらには、この所式が哲学的内容にいかに重要であったか、を理解する困難がわけても自覚されるにつれ、いっそう顕著になった。シュライエルマッハーは、[3] あくまでも『パイドロス』に助けられて、上にみた新たな標準理解―これ以外のすべての作品でも基礎となった―に到達した。かれは、プラトンの意を汲んで、『パイドロス』を著作活動の〝序曲〟に位置づけるべきだと考えたけれども、これとて驚くにあたらない。そののち、十九世紀のプラトン研究は、〝作品の歴史的発展〟という発想を受け入れはじめて、個々の対話篇の成立年代をいっそう正確に特定しはじめた。そうした中で、『パイドロス』

の成立を後期にみる証拠が数多く見いだされた。と同時に、プラトンの対話篇執筆活動の全体は〝教育的傾向〟をもち、こうした傾向は計画通りに『パイドロス』でも告知されている、と考えるシュライエルマッハーの基本思想も信用をなくした。[4] 今や『パイドロス』のそもそもの意味は、第一部のエロース演説か、あるいは、偉大なソクラテス演説での霊魂論とイデア論に―さらには、哲学的問答法をめぐる第二部での教育的表明に―求められるようになった。そしてついに、この作品は、言葉使いが豊富で、ここでのプラトン思想を表明する〝構成〟も複雑であることから、著者の最高の円熟期に押しやられて、プラトンの晩年期に属する他の対話篇との繋がりが、さらにいっそう見いだされることになった。『パイドロス』は当初、長らく『饗宴』の傍らに―それゆえプラトンの学園創設後の初期に―ズラし置かれていたけれども、今や、この哲学者の晩年にまで引き降ろされざるを得なくなった。[5] 哲学的問答法を理論的に説明しようとする著者自身の関心が、今や、いわゆる〝弁証法的対話篇〟の一群に『パイドロス』を含み入れるメルクマールとなり、弁証法的対話篇はしかも、そうこうする内に、疑う余地のない証拠を介して、プラトンの晩年に割り振られたからである。[6]

『パイドロス』の構成は、わけても困難で、わけても論議を呼ぶ問題の一つを提供する。ディテュランボス調の〝威勢よさ〟を強めていく第一部でのエロース演説は、真のレトリックの本質をめぐる第二部での抽象的で理論的な探求と、完全なまとまりなど望めないように思われる。こうした構成が読者に与える困惑の大半は、確かに、まず考えられる『饗宴』との、とはいえ誤った〝対比〟から専らにやってくる。徹底してエロース問題に捧げられた『饗宴』に並べると、『パイドロス』は、プラトンの第二の偉大なエロース対話篇の姿を容易にまとってくる。『パイドロス』の構成の表面をこのように一面的にライトアップするなら、第二部は完全に取り残されるか、あるいは、単なる〝増築〟の機能しか果たさない。第一部と第二部のギャップは、そもそもの第二部で、プラトンの哲学的問答法の賛美をとりわけ強調する時、さらにいっそう大きくなる。こうした窮境から救われるには、この作品が生み出された―さらには、プラトンがはっきりとこの作品をはめ込む―〝精神状況〟を理解する以外に道はない。

『パイドロス』の一体的まとまりは、レトリックの問題に関わっている点にある。第一部にせよ第二部にせよ、同じく、この問題に捧げられている。解釈者たちの困惑の大半は、第一部と第二部を結び付けるこうした絆の誤解から生じた。いわゆる〝エロース〟をめぐる第一部は、リュシアスの演説朗読と、それへの批判から幕を開ける。ここにリュシアスが登場するのは、かれが、ソクラテスの時代に最も勢力のあったアテナイの弁論学校の指導者として、人びとの声望を一身に集めていたからである。[7] プラトンは、〝エロースの価値〟という同じテーマを扱ったソクラテスの二つの演説を、順に、リュシアスのそれに対比させる。これによってかれは、エロースをめぐる誤ったリュシアスの前提から出発しつつ、いかにすれば、同じこの対象をよりよく扱うことができるかを、あるいは、もしも本当にエロースの真の本性が知られたなら、エロースについてどう語るべきか、を示そうとしたのである。これに呼応して、第二部では、より一般の仕方でまず、レトリックの欠点と、ソクラテスの時代に支配的であったレトリックの仕組みが論議され、次いで、真のレトリックに至る手段としてソクラテスの哲学的問答法がいかに優秀であるか、が正しく照らし出される。とはいえ、〝こうした真のレトリックはそもそも存在しうるのか〟の問いは、答えられないままである。けれども、プラトンの描くソクラテスは、若いイソクラテスに大きな期待を寄せている。そしてこの対話篇は、イソクラテスへの敬意に溢れた言及で

幕を閉じるのである。[8]

上にみたイソクラテスへの称賛は、リュシアス―かれの手で『パイドロス』の第一部も第二部も、ともに幕が開かれた―への非難と、意識的なコントラストをなすと考えられている。[9] このコントラストは、プラトンが、『パイドロス』を執筆していた頃に、〝レトリック教育はどうした価値をもつか〟という、すでに『ゴルギアス』でかれを煩わせ済みの問いに、改めて活発に取り組んでいたこと、レトリックの発展上の大きな転換―イソクラテスの名が記されるところの―が、こうした関心と結びついているにちがいないことを示している。もっとも、ここでプラトンが明らかにイソクラテスに与えている称賛も、普通は〝値引き〟されがちなのだが、ともあれ『パイドロス』の成立年代を〝もっと遅く〟査定する最近の研究が正しいとするなら、イソクラテスの学校とのこうした関わりは、その「正しさ」を裏書きする重要な証拠となるだろう。〝この種のエピソードはそもそもイソクラテスの活動したどの時期に属するのか〟は、アプリオリに語り難いとしても、それでもやはり、この人物（イソクラテス）はいつか大物になると予言したソクラテスの言葉は、明らかに、プラトンの青年期なら意味をなさなかったろう。かれの青年期には、一般に、イソクラテスの学校はいまだ存在しなかったし、それゆえむろん、イソクラテスを他の演説代筆者連中から、うまく区分できなかったろうからである。イソクラテスの新しいレトリックが徹底して吟味され、〝当人がどうした精神の申し子か〟が明かされてのち、はじめてプラトンは、アテナイで最も強力なライバル校の長である人物に、ソクラテスが約束したこの栄冠を授けようと思い立つことができた。[10] プラトンのこうした論評は、イソクラテスの学校が創設された―ほぼ前三八〇年か前三九〇年の終わりに当たる―初期の頃にもそぐわなかった。イソクラテスは、『ソフィストを論駁する』という自らの綱領的作品で、さらには『ヘレネ頌』でも、プラトンのパイデイアを鋭く拒絶したからである。とはいえ、プラトンの学校とイソクラテスの学校の精神的関係が紆余曲折をへる中で、のちには、〝歩み寄りの瞬間〟も存在したにちがいない。それはしかし、アリストテレスが、アカデメイアでレトリックの授業を組織し、これによってイソクラテスと張り合う以前であった。この張り合いは、以後、公開の書簡口論に堕したからである。[11]

『パイドロス』はあくまでも、プラトンとレトリックの関係上の〝新たな段階〟として理解されるべきである。『ゴルギアス』では、レトリックはいまだ完全に拒否されていた。レトリックは、かれにとって、〝真実〟でなく〝単なる見せかけ〟に基づく教育の典型であった。なるほど、より詳しく耳を傾けるなら、『ゴルギアス』にも〝レトリックに対するプラトンの自覚〟と命名されてよい事柄、への一時的コメントなら目にすることができる。[12] プラトンは、『饗宴』と『メネクセノス』で、当時の弁論術のあらゆる様式を模倣し、かつ、それらを超え出る才能の輝きも実証したのだから、レトリックに全く無関心ではいられない自分を実感していたはずである。かれは、生まれつき備わった弁論の才を、そもそものはじめから〝哲学〟に捧げたのだった。このことはしかし、かれにとって、言葉を用いた有効な思考展開の断念を意味するのでなく、逆に、これをとりわけ強く励ますものであった。イソクラテスは、哲学的問答法が必要以上に細やかで、そうした細やかさは教育手段として無益であると力説し、さらには、こうした問答法を、おのれの弁論術の実際的価値に対比させる傾向を強めていった。これに呼応してプラトンも、よりいっそう、自らの問答法的教育が、他でもないこの目的にいかなる意味をもつかを公表する必要があるな、と実感したにちがいなかった。かれは、まことに正解にも、あらゆるレトリックの前提条件は、概念的・心理的な区分をいっそう鋭くし、いっそう明確にすることだと提示できた。

かれはまた、そう苦労もなく、こうした精神能力を訓練しないなら、弁論家も文章家も、真の説得力を手に入れるのは難しく、技術的なテクニック―今日と同じく当時も、学校でのレトリックの通常の手引書が提供したような―は、この精神能力に代わることはできないのだと明示した。プラトンが『パイドロス』を書いたのは、まさしく、自らのパイデイアのこうした側面を正しく照らし出し、パイデイアの主張を、この方向に固定するためであった。その当時、プラトンの弟子としてアカデメイアの教師団の一員であった若いアリストテレスは、〝レトリックを新しい教科として実際にプラトンの授業中に導入しよう〟と試みていたが、この企てには、師の宣言が直接の弾みとなった公算が大きい。疑いもなくこの弟子は、当の企てを介して、『パイドロス』に示唆された学問的土台の上に築かれた〝新しいレトリック〟がいかなるものか、の具体例を示そうとしたのであった。[13]

プラトンが、『パイドロス』の冒頭で、エロース問題の論究に深く入り込んでいるからといって、これに幻惑され、この対話篇のそもそもの目的は〝エロース問題の論究〟にある、などと考えてはならない。大いに重要なのは、リュシアスの模範演説―これを、かれは生徒たちに〝暗誦教材〟として与えていた―の朗読こそ、この作品の出発点であったことである。[14] こうした人目を引く構成は、エロースというテーマへのレトリックの扱い方を批判するのが、プラトンの本来の目的であった場合にのみ意味をもつ。演説の対象にエロースが選ばれたのは、弁論学校での練習テーマに〝エロース〟が人気を博していたからである。ちなみに、アリストテレスの散逸作品のタイトル中には、エロースに言及したレトリック的命題の完全なコレクションがある。[15] エロースに素材を求めた練習実践はしかし、ずっと以前から弁論学校でなされていたにちがいない。明らかに、生徒たちの興味・関心に譲歩してのことであった。エロースをめぐるプラトンの著作にも、実にここから、ある種の光が投じられる。[16] 何らかの学校が、若者の心を強く揺り動かすこの問題（エロース）を全く無視することなど、およそ考えられなかった。あらゆるレトリック的朗読が、リュシアスの流儀に従いつつ為した以上の深さで、たとえプラトンがエロースを把握したにしても、である。エロースという問題の論究は、プラトンに、哲学者たちには徹底して重要な〝内容的真実〟という問題を、〝様式〟の問題から切り離して扱うチャンスを与えてくれた。弁論学校が、このセンセーショナルなテーマを内容的に料理せず、単に誘惑されるだけを欲したとするなら、プラトンの方は、同じテーマを〝戯れの姿勢〟で取り上げながら、エロースの本質を問う自らの哲学的思索の深みから汲み取りつつ、それに対抗する演説―レトリックの二流仕事のあらゆる陳腐さ・あらゆる曖昧さを含んだところの―を傍らに置いたのであった。

プラトンは、リュシアスの演説がくり返しに溢れ、総じて対象（エロース）を概念的に鋭く捉えていない点を指摘する。[17] ここにはすでに、第二部で問答の中心を占めるところの、〝プラトンの哲学的問答法は、レトリックによる陶冶にどうした実践的意味をもつか〟の問いが、具体例を用いて示されている。と同時にしかし、自らの対抗演説で、リュシアスの命題をいっそう深く論理的に根拠づけようと努めるソクラテスの企てを介して、この命題の底にある〝本質的な誤り〟が暴露される。とはいえここは、こうした命題の中身をこれ以上に詳しく扱う箇所ではない。われわれにもっと重要なのは、『パイドロス』の基本線である〝レトリックの問題〟から目を離さないことだからである。恋する者の言い寄りに屈する―この際に考えられているのは、何はともあれ〝身を捧げる〟ことである―のは、そもそも許されうるのかどうか、もし許されるとすれば、それは、どうした状況においてなのかこそ、アテナイの若者たちの間で

大いに論じられた問題であった。われわれも、こうした論議のいかにあったかを、『饗宴』のパウサニアスの演説を通して知っている。リュシアスはしかし、〝そうした場合にも、愛される若者は、いささかもエロースに捉えられず、冷静な血を保っている恋人の方に身を捧げるのが、いっそう良いのだ〟と逆の命題を主張して、これが〝許される〟と考えた連中一般を凌駕した。[18] こうした恋人なら、あまねく恋人に特有の〝激情の嵐〟に引き回されないだろうし、さらには、あまねく恋人に認められるように、利己的に、あらゆる力を動員して若い愛人を自分以外の人間から引き離し、あくまでも自分だけに縛りつけておこうと欲して、当の愛人を損なうこともないだろうからである。ソクラテスは、最初の演説―この命題がいかに不敬であるかを自覚していたために〝頭を覆いながら〟行なわれた―で、さまざまの欲情を論理的に鋭く区分して定義しつつ、ここでの根拠を補強した。その場合にかれは、エロースを、完全に〝感覚的欲情の亜種〟といったリュシアスの意味に捉え、これを前提に自らの論証を構築する。[19] 恋する者は、この定義に従うなら、〝感覚の快〟を〝善〟以上に好むタイプの人間である。かれは、利己的で、嫉妬深く、妬みに満ち、暴君的である。かれの内にはだから、若い愛人を肉体的に完成させようとする、そしてまた、精神的に完成させようとする姿勢は何ら見当たらない。かれは、愛人の肉体的健康を、おのれ自らの願望の充足より下位に据える以上、こうした愛人を、精神的な点で「哲学」からできるだけ遠ざけておく。[20] つまりは、率直に言って、愛人が自分から進んで内的に発達していくのに、いささかも関心がないのである。かれと愛人は、すべての点で『饗宴』が神々しく描き出した〝本当の教育的エロース〟と、逆の関係にある。[21]

こうした矛盾はすでに、ソクラテスが、この演説中では、エロースの本質をめぐる自らの見解を〝真面目に〟主張していない、のを疑問の余地なく曝け出している。もっと正確に言うなら、かれは、なるほど真面目に語ってはいるものの、そこに語られているのは、到底〝エロース〟の名に値しない亜流のエロースなのである。哲学的問答法の限りを尽くしてここに基礎づけられた見解ほど、ディオティマの演説で告知された、エロースの本性についての高次の見解に背くものは見当たらない。ここに語られた見解は、実のところリュシアスが、口には出さなかったものの、エロースという言葉でそもそも何を理解していたかをはっきりと照らし出すために、これほど鋭く浮き彫りにされているにすぎない。とはいえ、哲学的問答法を用いて対象をこれほど鋭く把握することで、論議は、内的必然の流れに沿って、この段階の〝エロースの定義〟を越え、哲学的洞察の〝真の高み〟にまで導き上げられていく。ソクラテスは、この把握に促されて、エロースをめぐる第二の演説に向かう。第二の演説は、まさに「引き返し（パリノディア）」であって、ここでかれは、神とその真の本性に加えた冒涜を償うべく、〝神的な狂気〟がいかなるもので、それが、反―神的で有害な〝人間的狂気〟の諸形態とどれほど区分されるかを、比類のない見事さで叙述し始める。[22] エロースは、ここでは、詩人の才や予言者の才と同レベルに置かれ、神与の霊感こそ、かれらに共通の本質とみられている。詩人を創造に駆り立てる感動が、ここではプラトンの手で、まさに直接に、この感動のそもそもの本性に則って、最高の意味での〝教育的現象〟と認識されているのだが、[23] これと同じ要素が、そもそもの初めから真のエロースでも機能している。〝エロースが教育する〟という把握は、次いで、魂の本質をめぐるプラトンの教説でいっそう深く根拠づけられる。[24] この教説は、〝気概〟と〝欲望〟という異なる魂の部分を形容した二頭の車馬と、それらを操縦する〝理知〟という名の御者のミュートスを介して、ダイナミックに視覚化されている。[25] ソクラテスの演説は、熱狂の度をいっそう高めつつ、この天空を突き抜けたさらに上の領域―

そこでは、エロースの息吹に触れた魂のみが、自らに最も類した神に従って〝純粋な実在〟を直視するに足る存在とみなされている―にまで昇りつめていく。[26] ソクラテスは、自分の演説が詩的なスタイルを採っているのは、他でもない、パイドロスのためなのだと弁明する。[27] レトリックの教育に従事する生徒として、この教育を賛美するパイドロスには、これ以外の語り口は見当たらない。ソクラテスはしかし、〝哲学者は、もしも本当に望むなら、レトリック教育の技術をあっさりと凌ぐこともできるのだ〟と、かれに実証する。ソクラテスの言葉にみられるディテュランボス調の威勢よさは、弁論家の高尚なスタイルにしばしば見られるような〝冷ややかな気取り〟などでなく、まさしくエロースの〝内なる泉〟から迸り出てくるのである。かれはそして、エロースの精神力への抵抗不能を、おのれの演説で証明したのだった。

弁論家と哲学者のこうした弁論術をめぐる合戦から、問答の歩みは、〝どうすれば最も善く語り、最も善く書くことができるか〟という一般的問いに、[28] それゆえ、およそレトリックの基本中の基本問題に、当然かつ容易に導かれていく。その際、プラトンにわけても重要なのは、〝思考を言語化するにあたり、真理の知識はそもそも必要なのかどうか〟の問いである。[29] これこそ、弁論術教育と哲学教育の二つの道が、きっぱりと分かれる岐路に他ならない。プラトンは、『ゴルギアス』と同じくこの箇所でも、おのれの論究を〝テクネー（技術）〟の概念に結びつける。かれは、レトリックを厳密な意味での〝技術〟と認めず、およそ客観的な基礎づけを欠いた、単なる〝熟練〟にすぎないと説明する。[30] 本当の技術は、真理の知識を拠り所とする場合にのみ、こうした知識から生じてくる。とはいえレトリックは、たいていは実践的に、〝あるいは裁判で、あるいは民会で人びとを納得させる技術だ〟と定義される。[31] このための手段は、弁論と逆―弁論である。[32] こうした両論はしかし、実生活では、単に裁判や民会などの公的機会にのみ登場するのではない。それは、およそ人間の思索と会話のいたる所に登場する。[33] つまるところ両論は、すべてを、すべてと比較する能力の内にある。弁論家の立証は、何はともあれ〝類似〟に訴えてなされる。[34] こうした点からプラトンは、明らかに、〝方法〟という―わけても〝論証〟という―論理的問題に大いに煩わされた晩年、完全に新たな意味で、レトリックとその説得手段に関心を抱いたのだった。プラトンの弟子スペウシッポスは、『パイドロス』が書き上げられた頃、哲学的問答法をめぐり〝事物の分類〟を扱った大規模な作品を、『類似物』というタイトルでまとめ上げた。[35] 対象の論理的定義はすべて、似ている点と異なる点の認識を基礎にする。もし仮に、レトリックの目的が〝聴衆を欺く〟ことに、つまりは、〝似ている点のみに訴えて誤った帰結に導く〟ことにあると仮定しても、これですら、問答法的な〝分類〟方法の正確な知識を前提するだろう。というのも、事物の多彩な似ているレベルの洞察は、この知識を介してしか手に入らないからである。[36] どれが鉄でどれが銀かについては、そう簡単に間違わないけれども、何が善くて何が正しいかについては、簡単に間違ってしまう。[37] 人びとの意見が互いに一致したり、一致しなかったりする事柄については、誰であれ、その「イデア（形相）」を方法的に正しく定義できないなら、明答はできない。ソクラテスはだから、エロースをめぐる自らの演説でも、論証を展開するにあたり、まずは対象の概念的定義から出発する。[38]

ソクラテスは今や、おのれの演説を終えたのち、リュシアスの演説の冒頭部分を改めて引き出し、この演説が、本来は止めるべきであった地点から出発している、と指摘する。[39] 次いで、この演説が一般レベルで批判され、〝演説の全体は、張り詰めた構成をもっていない〟と指摘される。演説はすべて、生き物のように、有機的身体をもたなくてはならない。つまりは、頭が無くてもいけないし、足が無くてもいけないのであって、

正しい始めに加え、正しい中間と、正しい終わりも備えていなくてはならない。こうした分肢はすべて、お互い同士でも全体に対しても、ふさわしい関係を保っている必要がある。以上の基準に照らすなら、リュシアスの演説は〝完全な欠陥品〟であるように思われる。[40] プラトンはここで、文学的構成とはどうしたものか、への深い洞察を漏らしている。この洞察は、詩芸術とレトリックをめぐる古典理論の基礎的要求として、次の時代に受け容れられたのだが、[41] われわれに重要なのは、ともあれ、文学作品は有機的まとまりをもつべきだという上の要求が、レトリックの芸術論からでも詩人からでもなく、まさに哲学サイドから申し立てられたこと、この要求を口にしたに相違ないのが、他でもない、ナチュラルな有機的全体の賛美者であり論理の天才でもあった、プラトンという〝哲人芸術家〟だった二点を学ぶことである。演説を論理的に構成する必要は、概念の相互関係を組織的に探究して得られた偉大な発見の数々から、プラトンには、まさに〝課題〟であると判明した。この種の組織的探究の具体例は、晩年のいわゆる〝弁証法的対話篇〟に、練習目的の形で披露されている。そもそも何がプラトンを駆り立てて『パイドロス』を執筆させたのか。他でもない、見たところ抽象的で厄介な後期イデア論の抱える理論的問題が、実際的な〝話す能力〟や〝書く能力〟—これらは当時、多くの人びとに希求され、大いに論じられた当の対象であった—のわけても素朴な必要条件（＝概念の相互関係の組織的探究）といかに深く繋がっているかを、かれが、ますます洞察できたからである。けれども、とりわけプラトンを駆り立てたのは、やはり、こうした能力への哲学の積極的寄与を訴えて、〝哲学は役に立たない〟という弁論家たちの批判を論破したかったからである。憎しみに満ちた、あるいは侮蔑に溢れた口調での論争—プラトンへの対抗活動のそもそもの始めに、イソクラテスも好んで用いたところの—に加わる代わりに、かれは、高く尊敬できるこの相手（イソクラテス）を大いに誉め称えた。この称賛は、二人の領域間の深い精神的関係を示唆している。

プラトン自身は、第一部での三つの演説—リュシアスの演説とソクラテスの二つの演説—は、レトリックと哲学的問答法の関係を視覚化する〝手本〟に役立てられるべきだ、と述べている。[42] かれは、こうした批判的論評ののち、リュシアスの演説はそのまま放置して、〝レトリックは基本において哲学的問答法に従属する〟と明示したソクラテスの二つの演説、に言及する。[43] この箇所でプラトンが与えているのは、ソクラテスの両演説でそもそも何を追求したかったかの意図と、こうした演説が具体化すべきであった見解の双方を理解する上での完全な指示である。[44] ソクラテスの二つの演説は、詩的な言葉使いにも拘わらず、概念的な〝区分〟と〝綜合〟のお手本を示している。相互に条件づけ合ったこれら二つのプロセスは、一緒になって、哲学的問答法の全体を形造っている。[45] プラトンは、最初のソクラテス演説で、概念的区分の簡単な経過と帰結を要約しつつ、この点を明らかにする。[46] 哲学的問答法の〝区分（ディハイレシス）の働き〟と〝綜合（シュノプシス）の働き〟を説明したこの箇所は、同じ対象を語った他の箇所に比べて、とりわけ明瞭でとりわけ綿密である。ここでは、この点を単独に取り上げることはできないけれども、プラトンが、弁論術をはじめ、言葉のより高次の意味で「技術的」といえる事柄全般の本質はここにあるのだと、この箇所で解説しているのは重要である。[47] レトリックの他の部分、すなわち、リュシアスやその同僚たちが弟子に教える事柄はすべて、それだけを取り上げるなら、断じて〝技術（テクネー）〟を構成する資格はない。それらは、レトリックのいわば〝技術以前〟の部分を形造っている。[48] プラトンは、弁論家たちがテキストで区分する個々の演説部分の術語的呼称を、わざと滑稽にすべて列挙する。[49] ここには、古いレトリックを代表する連中が、すべて実名で登場するの

に加えて、さらに、かれらの考案した特別な工夫の数々―複雑の度を高めがちな―も部分的に顔を覗かせている。プラトンは、こうした考案物を軽視しないものの、それらをまとめて二次的な地位に追放する。ここに挙げた連中はすべて、演説をまとめ上げる有意義な〝手段の数々〟を供給してきたけれども、[50] かれらは他方、人びとを説得する技術・全体的まとまりを構築する技術まで教えることはできなかった。

イソクラテスは、レトリックをめぐる綱領的作品で、常に〝素質〟のみを最も高く評価し、〝練習〟と〝知識〟には、これと比べてごく些細な場所しか与えなかった。プラトンも、ソフィストたちが〝完全な弁論術〟の成立に際して区分した、素質・練習・知識といった三要素の内的関係を、やはり『パイドロス』で扱っている。[51] かれはしかし、イソクラテスがほとんど評価しなかった二要素の価値を毅然として擁護する。すなわち、とりわけて〝知識（エピステーメー）〟を、[52] しかしながら〝練習〟の方も擁護している。後者については、明らかに、アカデメイアでの教授活動が念頭に置かれているのだろう。かれの学園では、論理学が、一方では理論的研究それ自体として、他方では、実践的な練習課題として勉強されていたからである。イソクラテスはしかし、創造的な芸術家の直観（つまりは素質）がレトリックでも強く関与するのだ、と繰り返し訴える。[53] なるほど、かれが口にして軽蔑する類いの知識（エピステーメー）ないし学習（マテーシス）は、まさしく、古いスタイルのソフィスト的な弁論家にお定まりの教育活動そのものである。プラトンはしかし、この種の知識ないし学習を、哲学による論理的訓練と置き換える。こうした論理的訓練は教えることが可能である。それはしかも、別の何かを教えようとする場合に、わけても欠くことができない。こうして、従来のレトリックへの批判から、完全にオリジナルなこの技術の理想像が、かれの心に密かに成長してくる。およそレトリックは、この理想像が実現されて

はじめて、本来的に、真の意味での〝技術（テクネー）〟となるだろう。レトリックと哲学の合体、様式と知的内容の合体、表現能力と真理の知の合体―これこそ、レトリックの理想像に他ならない。古えの哲学学校は、総じてレトリックを〝受け入れＯＫ〟とみなしたのだが、そうすればするほど、こうした綱領（＝両者の合体）も常に受け継がれたのであった。[54] レトリックの場合、もっとのちにはじめて、それも、論理的にあまり厳密でないごく一般的な意味で―つまりは、話す技術と哲学的な知性陶冶の結婚という形で―この綱領が受け継がれた。すなわち、プラトンの〝綜合〟は、キケロを促して、その著作『弁論家について』で自らの陶冶理想（＝話す技術と哲学的な知性陶冶の結婚）を語らしめた。[55] これはさらに、キケロを介して、クインティリアヌスの『弁論家教育論』にも影響の手を伸ばしている。プラトンは、実際的弁論の歴史の中に、この種の綱領を備えたレトリックの典型を求めて、これを、ペリクレスの内に見い出した。ペリクレスの弁論家としての偉大さの源は、かれの深い知的陶冶にあった。かれの思索の全体を貫くとともに、いかなる政治家も至り得ない〝高さ〟をその弁論に与えていたのは、他でもない、かれの友人で、かれがパトロンを務めていたアナクサゴラスの哲学的世界観であった。[56]

プラトンは、弁論家がなぜ実質的に専門教育を必要とするのか、をさらに別の観点から明らかにする。弁論家が対象とするのは〝魂の感化〟であり、かれに固有の技術は、弁論の外観を単に飾り上げることによりは、〝魂の研究〟にいっそう深く関わっている。[57] 最も近い対比物を挙げるなら、医者の仕事がおのずと浮かび上がってくる。プラトンは、すでに『ゴルギアス』で、医者の仕事と弁論家のそれを対比していた。[58]『ゴルギアス』では、医者を例に、真の技術（テクネー）の何であるかが説明されたけれども、『パイドロス』では、同じく医者を例に、正しい方法の意味と

その手順が説明されている。プラトンは、真の医術の体現者としてヒポクラテスその人を紹介する。[59] かれは、医者の精神態度の本質的特徴を、人間の身体を扱う際にも常に〝自然の全体〟から―つまりはコスモスから―目を離さない点にある、と考える。それゆえ、著作家であれ弁論家であれ、もしも読者や聴衆を正しく導きたいと思うなら、人間の魂の世界を、そこでの動きと力のすべてに亙って把握していなくてはならない。[60] 加えて医者は、事象の自然が単一であるのか、それとも多様であるのかを、そして、それがどのように働くのかを、あるいは、それのさまざまな様式が相互にどう作用し合うのかを正確に捉えていなくてはならないように、弁論家も、数ある魂の様式とその起源、さらには、それらに相応しい弁論の各様式を認識していなくてはならない。[61] レトリックはすでに、これら弁論様式の数々―つまりは言論の「パターン群」―を教授していた。[62] けれども、プラトンが意味する〝レトリック〟のデザインで真新しいのは、弁論の様式はそれぞれ、まさしく直接に魂の行動様式のそれぞれに還元され、弁論の様式はだから、魂の行動様式のおのずからの表出だ、と解釈される点である。[63] こうして、レトリックの訓練における力点のすべては、あくまでも〝内側〟に置かれることになる。

プラトンが、自らの精神に固有の強さをいかに徹底して自覚していたか、は注目に値する。こうした強さの源は、ここでもやはり、魂的なものへの深い洞察にある。特定の表現様式が、それに見合った魂の働きに条件づけられるという洞察は、かれの手で、ここでは、〝特定の内的気分ないし永続的性向を備えた人間は、それに相応しく選び抜かれた弁論手段を介してのみ説得され、当の事柄を為すように促される〟という実践的主張になる。[64] 言葉による人間へのさまざまな影響の心理的基底を、こうした形で暴露する企ては、プラトンが、他の誰にも勝って〝自然から〟割り当てられた仕事であった。ここで特徴的なのは、かれが、〝心理学的カテゴリーのまことに包括的な体系を、レトリックに用いるという目的でまとめる〟といった理論的要請に甘んじないで、これに並んで、こうしたカテゴリー的認識を具体的場面や所定の時点に実際に応用する中で、いろいろテストすべきなのだと強調している点である。[65] この強調はしかし、プラトンが、すでに『国家』で実体験と性格訓練に、純粋な精神の陶冶と同じだけの大きな価値を置き、さらには、それと同じ長さの時間も割り当てていたのだから、われわれの予想に沿ってもいる。

ここでの真新しさは、だから、弁論家の精神の教育に用られたプラトンの方法にある。『パイドロス』は、『国家』で展開されたプラトン的パイデイアのプログラムに、レトリックという新たな領域を付け加えた。このレトリックはしかし、プラトンの手で、『国家』が境界づけた枠組にピタリとはめ込まれている。『国家』の狙いは、未来の統治者の教育にあったけれども、『パイドロス』の狙いは、あくまでも弁論家と著作家の訓練にある。[66] こうした両作品に固有なのは、単なる〝実践の徒〟には分かるべくもないタイプの、精神的訓練への訴えである。[67] 『パイドロス』での哲学を介した弁論家教育のプログラムには、〝この目標に至りたければ、もっと長い「回り道」が必要である〟という『国家』の基本思想が、そのまま繰り返されている。[68] これによってプラトンは、明らかに、『国家』の教育論を引き合いに出している。この場合の「回り道」は、いつもと同じく、哲学的問答法という名の道を意味する。[69] こうした回り道は、ごくわずかの熟練で通り抜けてやろうと考える類いの人間には、驚くほど長く、驚くほど辛いと思われるにちがいない。プラトンの教育哲学はしかし、最も低い目標でなく、最も高い目標に常に焦点づけられている。そして、この目標から眺めるなら、弁論家が担うべき課題を正しく全うしようと望む人間にとって、より短くて、より楽な道などおよそ存在しない。プラトンが、この課題を倫理的な意味で捉えていたのは、

疑いの余地がない。けれども、たとえひとが〝こうした目標はあまりに高く捉えられ過ぎている〟と考えるにしても、哲学的な回り道は、われわれもすでに気付いていたように、避けることができない。レトリックの教師たちは、原則的に、真理を求める代わりに、真理らしさ・もっともらしさの次元に甘んじている。[70] プラトンは、『パイドロス』では、かれらを相手に〝真理を語るのが必要だ〟などと説得しようと望まない。かれはむしろ、いつもと同じく、一見したところ相手の立場に身を置いて、まさに相手の立場から、知が、相手にとっても不可欠なことを明示する。プラトンは、かつて『プロタゴラス』で、もしも大衆の信じるように、人生の最高の善が快楽であるにしても、その場合でもやはり、より大きな快とより小さな快を、そしてまた近い快と遠い快を正しく区分する基準として、知が不可欠である点を明示して〝知の価値〟を証明した。同様にかれは、『パイドロス』でも、前もって真実を知っていなければ、真実らしさ（エイコス）―レトリックの論証がたいてい土台としているところの―を見つけることも叶わない点を明示して、弁論家に知がいかに必要であるかを証明する。というのも、真実らしさとは、〝真実に似ているように見える〟ことだからである。[71] あらゆるレトリックが真に目指すところは、もちろん、〝人間に喜ばれるように語る〟ことでなく、プラトンも最後に告白しているように、〝神に喜ばれるように語る〟ことである。[72] これはまさに、われわれが、『国家』や『テアイテトス』や『法律』から知っている教えに他ならない。初期対話篇のあらゆるアポリアは、晩年期のパイデイアにひときわ強い〝神中心の立場〟で、最終には解消されていく。

プラトンは、本格的な弁論家の〝書く技術〟の価値は、あくまでも認める気持でいる。〝書く技術〟はしかし、天才的な考案物というだけでは、いまだ神の気に入られない。こうした〝書く技術〟、つまりは活字が、エジプトの神トイスの手で発見されたというミュートスは、この点を明らかにしてくれる。[73] トイスが、おのれの新たな発見を携えてテバイのタムスを訪問し、〝わたしはこの発見によって、記憶を助ける良薬―それゆえ知を助ける良薬―を人びとに調合したのだ〟と自慢した時、タムスはこう答えた、〝文字の発見はむしろ、記憶を疎かにし、魂の内に物忘れを生み出すことでしょう〟と。というのも人間は、生き生きした記憶を自らの内に保っておく代わりに、文字を頼りとするだろうからである。[74] こうして、〝真の知〟に代わって、〝見せかけの知〟が育てられるだろう。プラトンの偉大さのすべては、書かれた言葉への、こうした超越的態度に現われている。かれ自身は、文学的な創作活動を介して、弁論家たちの作品に加え、この種の依存的態度にも出会ったのだった。われわれが、『パイドロス』の本文に目を通したのち、さらになお、〝プラトンはおそらく、この対話篇の終章部分で、他の人たちと同じく自身とも論争している〟のを微かに疑うにしても、『第七書簡』は、あくまでも明白に、〝プラトンという哲学者は、総じて、書かれた言葉で思想を固定化する試みはすべて、何らかの問題性を孕んでいると自覚していた〟のを示している。不特定の人たちが、かれの教えにコメントしたのをきっかけに、プラトンは、〝わたし自身は、一度たりとも自らの教えが記述可能だなどと思ったためしはない、だから、書き記されたプラトン哲学など、およそ存在しない〟といったパラドクシカルな説明を与えている。[75] 早くからひとは、これに似た『パイドロス』での見解が、〝ソクラテスの問答〟というプラトンの哲学的な著作様式で表明されている点に着目して、『パイドロス』が〝綱領的声明〟と解される根本の理由は、ここにあると考えてきた。とはいえ、初期のプラトンが、書かれた作品のすべてにこの種の疑念を抱いていたとするなら、果たして、あれほど膨大な著作群を世に送り出そうと特に駆り立てられたかどうか―実のところ、これを想像

するのはむつかしい。しかるに、かれの書いたすべての作品への断念が晩年に生じたとみるなら、こうした断念は、自らの創造的成果に対してすら自由を確保したい想いとして、心理的にも十分に理解できるものとなるだろう。

プラトンは、こうした晩年の気分もあって、『パイドロス』では、いっそう高次のレトリックという意味での〝書く技術〟にすら、ごくわずかな価値しか認めない傾向にある。かれの作品は、理解できる人とそうでない人を問わず、およそどんな人の手元にも届く。しかも、書かれた言葉は、たとえ不当に謗られた場合でも、自らを釈明することも、弁解することも叶わない。それは、自分とは別の言葉を〝弁護士〟として要請する。[76] これに対し、学ぶ者の魂に書き記される文字こそは、〝真の文字〟といえる。こうした文字は、〝自分自身を救う〟力を備えているからである。[77] インクで記された文字の唯一の効用は、それが、すでに知っている人に、知っている当の中身を思い出させてくれる点にある。[78] 当時のレトリックは、書く技術、あるいは「文字による弁論」に、より一層のめり込んでいた。プラトンはだから、〝哲学的問答法は直かに精神に働きかけて、これを形造る〟という事実に訴えて、レトリックに対する問答法の教育的優越を導いたのであった。ソフィストたちは、しばしば、陶冶の本質を〝農耕〟に対比した。プラトンは、この対比を引き継いだ。何らかの種子を本当に世話して実りを得ようとする者なら、これを、〝アドニスの庭〟に植え、八日の内に開花するのを目にして喜ぶことはないだろう。むしろかれは、正しい農耕の術に喜びを見い出し、その種子が、八ケ月にわたる厄介な世話ののち、ようやく実を結んだなら満足するだろう。[79] 種蒔きと栽培のこうしたイメージは、プラトンの手で、哲学的問答法による精神の鍛練に振り向けられる。真の意味での〝精神の耕作〟を念頭に置く者なら、レトリックという〝アドニスの庭〟でおざなりに栽培された、乏しくて早すぎる果実に甘んじることなく、哲学による真の精神陶冶の果実が、やがて立派に熟するのを気長に待つだろう。われわれは、この種の〝哲学的陶冶の擁護〟を、『国家』と『テアイテトス』から知っている。こうした擁護は、その前提に「長い回り道」を要請する。そして、いかにプラトンが、繰り返し常にこうした擁護に立ち戻っていったか、を見るのは重要である。[80] プラトン的パイデイアの種子は、『第七書簡』も語るように、長く生活を共有する中ではじめて開花しうるのであって、学校での授業を、わずかな学期だけ受けたのみでは開花しない。[81] プラトン的パイデイアのこうした弱さ—かれの敵の目に、それは〝弱さ〟と映ったからである—こそ、このパイデイアの真の強さであると証明するのが、いつもと同じく、ここでもプラトンの眼目である。かれのパイデイアが、この種の強さを十分に展開できるのは、ごく少数のえり抜きの人たちを対象にした場合でしかない。[82] 世に言う「インテリ」の大衆にとっては、レトリックこそ、幅も広くて手頃な道であったからである。

注

① 『パイドロス』二三八D，二四一E.

② このことは『ディオゲネス・ラエルティオス』Ⅲ，三八からも全く明らかである。ディオゲネスは『パイドロス』の様式に有罪を宣告した源として、逍遥学派（＝アリストテレス学派）のディカイアルコスを挙げているからである。ディカイアルコスは『パイドロス』でのプラトンの文体を〝退屈な〟と形容した。しかも、オリンピオドロス『プラトン自伝』の第三章における新プラトン的源は、『パイドロス』でのソクラテス演説がディテュランボス口調であることから、この作品の著者は〝年若い〟と結論している。こうして、ディオゲネスが『パイドロス』の問題設定全体に当てはめた「青臭い」という奇妙な概念は、基本的にはごく普通に、レトリックの様式批判上の〝非難〟を意味し、断じて内容上のそれではな

かった―この点は明らかだと思われる。ディオゲネス・ラエルティオスは『パイドロス』で扱われる問題を内容的に「青臭い」と非難しているが、これなど、当人の無学にふさわしいアドリブだとわたしには思われる。かれは明らかに、『パイドロス』の冒頭におけるリュシアス演説のテーマ―確かに徹底して〝くだらない〟―を、この作品のそもそもの「取り扱い問題」だと考えているのである。

③ 「ギリシア的陶冶の構築に占めるプラトンの位置」（ベルリン、一九二八年）の二一頁―これは『古典古代』Ⅳ巻（一九二八年）八六頁にリプリントされている―にまとめた〝十九世紀のプラトン研究史に占めるシュライエルマッハーの位置〟に関するわたしの詳論を参照のこと。

④ カール・フリードリッヒ・ヘルマンは、わけても『プラトン哲学の歴史と体系』ハイデルベルグ、一八三九年）でこうした転換を成し遂げた。これについては、先の注③に引用した『古典古代』Ⅳ巻の二三頁にわたしがまとめた〝十九世紀におけるプラトン像の変遷模様の歴史的スケッチ〟を参照のこと。

⑤ ヘルマンは『パイドロス』を、『メネクセノス』『饗宴』『パイドン』などの諸作品と一緒にして、『国家』『ティマイオス』『法律』に先立った〝プラトンの著作活動の第三期〟―とかれ自らが呼んだ時代―に位置づけた。ユーゼナーとヴィラモヴィツでさえ、このヘルマンを相手に、『パイドロス』をもっと早期に位置づけるシュライエルマッハーの立場を擁護した―もっともヴィラモヴィツは、こうした見解をのちには放棄したのだが―。H・v・アルニムは、ヘルマンの査定をさらに越えて、『パイドロス』の成立年代をもっと引き下げた。かれは、『プラトンの初期対話篇と「パイドロス」の成立年代』（ライプツィヒ、一九一四年）という著作で、『パイドロス』が〝プラトンの後期著作の一つ〟だと証明したからである。

⑥ J・ステンツェルは、その著『プラトン的問答法の発展について』（ブレスラウ、一九一七年）の一〇五頁以下（＝『プラトンの哲学的問答法』（オックスフォード、一九四〇年）の一四九頁）で、こうした要石をアルニムの証言に付け加えた。これによって、〝『パイドロス』は晩年期のプラトンの作品である〟と語った『弁論家について』十三章でのキケロの証言―ヘレニズム期の学者たちにまで溯る―の正しさが証明される。

⑦ 総じてプラトンが、それに立脚してはじめて、かれ自らの哲学をリュシアスの弁論技術に対比できた〝共通の基盤〟は、両グループが一致して申し立てる〝本当のパイデイアを代表するのはわたしだ〟という主張である。こうして、イソクラテスもまた『ソフィストを論駁する』という自らの綱領的作品で、次の三者を区分しつつ、かれらこそ、当時のパイデイアを代表する三形態であると語っている。すなわち、

一、ソクラテス主義者たち
二、アルキダマスに類する政治的弁論の教師たち
三、リュシアスに類する演説文ライターや法廷演説の作成家たち

である。

⑧ 『パイドロス』二七九A.

⑨ 『パイドロス』二二八A，二五八D.

⑩ すでにキケロは『弁論家について』十三章四二で、正しくも、「ソクラテスはこの若者についてこう予言する。プラトンはしかし、この老人についてそう書くだろう。しかも同じ形式で」と語っている。プラトンとイソクラテスの文学的関係を―アレクサンドリアの文献学者たちが為したように―注意深く吟味する人間なら、こうした帰結に導かれざるを得なかった。いわゆる〝ディオゲネス・ラエルティオスの証言〟は、もはや〝無価値なアドリブ〟とみなされてはならない。先の注②を参照のこと。

⑪ 拙著『アリストテレス』五七頁以下を参照のこと。

⑫ ソクラテスが、もしも唯一人の〝真の政治家〟であるとすれば（『ゴルギアス』五二一D）、かれはさらに〝真の弁論家〟でもなくてはならない。両者は同じ一つのものであるのだから。

⑬ われわれの継承したアリストテレスのレトリックが、弁論教師の教えたレトリックと区分される点は、課題を扱う哲学的仕方にある。こうした側面の評価については、F・ソルムセン「アリストテレスの弁論術と論理学の発展過程」（W・イェーガー編『新文献学研究』Ⅳ巻）二一三頁以下を参照のこと。

⑭ 『パイドロス』二二八B―E.

⑮ ディオゲネス・ラエルティオスのリストでは、番号七一「恋愛命題群」と番号七二「友愛命題群」である。

⑯ エロース問題は、同じく『饗宴』でも―とりわけ演説コンテストの開始部分とパイドロス演説で―弁論家の用いるポピュラーなテーマとして登場する。

⑰ 『パイドロス』二三四E以下，二三七C.

⑱ 『パイドロス』二三一以下.

⑲ 『パイドロス』二三七D―二三八C.

⑳ 『パイドロス』二三九B.

㉑ 『饗宴』に描かれる〝哲学的エロース〟がパイデイアに及ぼす決定的重要性に、遅ればせながら明るい光が投じられる。これは、ソクラテスが、自らの顔を覆いつつ語った最初の演説中で、愛をささやく大人連中を前にした若者に警告する形でなされた。かれは言う、こうした連中は「当てにならぬ輩であって、君の財産を損ない、君の身体の健康を損ない、おまけに君の魂の陶冶まで損なうのだ。魂の陶冶こそ、人間にも神々にも、およそ現に存在する限りの、あるいは将来に存在するであろう限りの最高のものであるのにね」（『パイドロス』二四一C）と。実のところ、こうしたすべては当然ながら、プラトン的な意味で逆転される。真の〝愛する存在〟は「相手の魂の陶冶」をわけても促進する人間だからである。『パイドロス』二四三Cを参照のこと。

㉒ 『パイドロス』二四四A以下.

㉓ 『パイドロス』二四五A以下．ここに述べられた〝詩人の本質とその働きをめぐる不朽の認識〟は、実に『パイドロス』全体の基盤であり、そこでの考察方法の基盤でもある。こうした認識はギリシア本来のものであった。

㉔ 『パイドロス』二四五C―二四六A.

㉕ 『パイドロス』二四六A以下.

㉖ 『パイドロス』二四七C.

㉗ 『パイドロス』二三八D，二四二B.

㉘ 『パイドロス』二五八D.

㉙ 『パイドロス』二五九E.

㉚ 『パイドロス』二六〇E以下．プラトンがここで引き合いに出しているのは、名を挙げていないが、あからさまに『ゴルギアス』である。

㉛ 『パイドロス』二六一A以下.

㉜ エロースをめぐるソクラテスの二つの演説は、こうした〝両論〟の手本であり、「どちらの側に味方しても語る」といったレトリック型トリックの基礎をなしている。この点については、プラトン自らが『パイドロス』二六五Aで語るところを参照のこと。

㉝ 『パイドロス』二六一A―Bを参照のこと。ここで強調されているのは、弁論家の術としての〝魂の誘導〟が、公の集会のみならず私的な会話にも適用されている点である。弁論家の方法は、『パイドロス』二六一Eでは、人間の陳述のすべてにまで拡張されている。

㉞ 『パイドロス』二六一D.

㉟ 今は失われたものの、古典古代には著名であったこの作品の断片類が、パウル・ラングの手で、その学位論文「スペウシッポスのアカデメイア文書について―断片を添付した―」（ボン、一九一一年）に収録されている。

㊱ 『パイドロス』一六二A以下.

㊲ 『パイドロス』二六三A.

㊳ これが、二つの演説におけるかれの手順である。イデア（形相）の区分は『パイドロス』二六三Bで要求され、これへのおびただしい言及が、それ以下（たとえば『パイドロス』二六三C，二六五A，B，C，D，二六六A）に見られる。

㊴ 『パイドロス』二六三E―二六四B.

㊵ 『パイドロス』二六四C―E.

㊶ ホラティウス『詩論』（V巻三四）での「全体に亙る関連」の要求を参照のこと。アリストテレス『詩学』二三でも、叙事詩とドラマにおける〝プロットの強いまとまり〟が同様に要求されている。ホラティウスは『詩論』第一部で、〝有機的まとまり〟というこの原則に違反した具体例を紹介している。とはいえこの原則自体は、一般的な形で述べられていない（むしろ、V巻三四でと同じく、副文の形で〝ついでに〟述べられているにすぎない）―この方が、かれの『訓戒』のスタイルに相応しかった

からである。けれども『詩論』の背後には〝深い洞察〟が存在する。この洞察をプラトンは、注㊲に引用した『パイドロス』の箇所（二六三A）ではじめて公式化したのだった。

㊷　当然ながら〝手本〟を意図されたリュシアスの演説は、プラトンの辛辣な論評に従うなら、われわれがしてはならない夥しい諸例を含んでいる。『パイドロス』二六四Eを参照のこと。そして、ソクラテスの二つの演説こそ真の〝手本〟であるべき点が『パイドロス』二六二D、二六五Aに述べられている。当時の弁論学校では〝手本を真似る〟方法が例外なく用いられていた。プラトンは、一方でこれを受け継ぎつつ、しかしながら違った意図で、すなわち、互いに比較される手本演説の欠点および長所を〝哲学的問答法の立場から〟明らかにするために、これを用いたのだった。

㊸　『パイドロス』二六四E―二六五A.

㊹　『パイドロス』二六五A以下.

㊺　『パイドロス』二六六B―Cを参照のこと。この箇所でプラトンは、先に説明された哲学的問答法の手順に関する帰結を、〝区分〟と〝綜合〟といった両概念を用いて図例的にまとめている。

㊻　『パイドロス』二六五A―二六六A.

㊼　『パイドロス』二六九D.

㊽　『パイドロス』二六九B―C「技術に入る前に予備的に学んでおくべき事柄」.

㊾　『パイドロス』二六六D―二六七C.

㊿　この意味での「手段」に相当するギリシア語は〝タ・アナンカイア（必要材料）〟である。注㊽を参照のこと。

(51)　『パイドロス』二六九D.

(52)　この点は、とりわけて公式化されていないにせよ、吟味全体の歩みから明らかである。ペリクレスの場合にも、かれの天分に並んで、わけてもかれの哲学的知識―アナクサゴラスから受け取られた―が強調されている。

(53)　イソクラテス『ソフィストを論駁する』一六以下.

(54)　H・v・アルニム『プルサのディオン―生涯と作品』（ベルリン、一八九八年）を、わけても詳細な「序論」を参照のこと。そこには、若者の

陶冶をめぐって争われた〝ソフィストの術〟と〝レトリック〟と〝哲学〟のいっそう広い交流的展開が、まことに完全に歴史的に概観されている。

(55)　〝キケロ自身は、プラトンへの―つまりは『パイドロス』への―かれの知識を介してこの綜合（＝結婚）に達したのか、それとも、後期アカデメイアの作家としての在り方に規定されていたのか〟の問いを、アルニムは、上掲書『プルサのディオン』九七頁以下で詳しく扱っている。後期アカデメイアでキケロに先行した人物には、ラリサのピロンがいた。かれは、すでにアリストテレスがプラトンの生前中に為したのと同じく、哲学学校の授業科目にレトリックを加え入れたのだった。

(56)　『パイドロス』二六九E―二七〇A. プラトンは『パイドロス』二六九Aでも、かれ（ペリクレス）を、伝説の王アドラストスに並べて〝手本〟と呼んでいる。このアドラストスは、ネストルと同じく、〝心を魅了する弁舌〟の典型的化身として古えの詩に登場する。ティルタイオス『断片』九・八を参照のこと。こうした英雄たちは〝真の弁論の徳〟を身にまとった人間として、あるいは神話に、あるいは祖国の歴史に顔を覗かせるのだが、かれらは単に、プラトンの〝レトリック〟概念の手本的好例として支持され例示されるだけでなく、当世風の演説テクニックの技巧家や専門家たちに見られる教師ぶった内容的不毛と貧困を白日の下にさらす役割も担っている。

(57)　『パイドロス』二六一Aを参照のこと。なおこれは『パイドロス』二七一C―Dにさらに詳しく述べられている。

(58)　『パイドロス』二七〇B.

(59)　『パイドロス』二七〇C.

(60)　『パイドロス』二七一A.

(61)　『パイドロス』二七一D.

(62)　イソクラテス『ソフィストを論駁する』一六―一七.

(63)　これに関してプラトンが『パイドロス』二七一D以下で教えているのは、他の箇所でと同じく、レトリックに用いられる〝魂の行動様式〟がどうしたタイプかの概略でしかない。この行動様式自体を技術面で推し進める試みは、プラトン対話篇のような芸術パターンの作品では断念され、代わって、豊かな心理学的中身を備えたソクラテスの二つのエロース演

説が、先にも述べたように、その〝具体例〟として用いられている。

⑥④ 『パイドロス』二七一D―E.

⑥⑤ 『パイドロス』二七一A―B.

⑥⑥ レトリックによる陶冶の本体は、『パイドロス』二七一Dでは〝弁論術を身に付けようとする者〟と呼ばれ、『パイドロス』二七一Bでは〝書物の著者〟と呼ばれている。とはいえ演説の術は、統治者や政治家が備えるべき能力にわけても相当するので、『パイドロス』では、統治者のパイデイアの中身―プラトンが『国家』で与えた―にさらに新たな局面が付け加えられている。あるいはもっとうまく言うと、プラトンは、哲学的に陶冶された統治者がレトリックの面でも優位に立つ根拠を、やはり同じく〝哲学的問答法による陶冶〟―『国家』における統治者のパイデイアの頂点に位置する―に見い出すのである。

⑥⑦ イソクラテスが、ソクラテス派の面々の哲学的問答法を〝無用の屁理屈〟と批判した（『ヘレネ頌』四以下）のを、わけてもかれが、こうした問答法を「政治的陶冶」だと主張するかれらに〝否〟を唱えた（『ヘレネ頌』六と八）のを参照のこと。

⑥⑧ プラトンの要求する訓練を〝長い骨折りも経ないで〟修得することはできない（『パイドロス』二七三E）。かれは『パイドロス』二七四Aで、こうした骨折りを〝遥かな回り道〟と述べている。プラトン的パイデイアの「遥かな回り道」については『国家』五〇四Bを参照のこと。

⑥⑨ 『パイドロス』のこの箇所は、同じ事柄に類似の言い回しを用いていて、われわれが『国家』五〇四Bに与えた解釈を裏書きしてくれる。

⑦⓪ 『パイドロス』二七一D（結末）.

⑦① 『パイドロス』二七二E.

⑦② プラトンに加えてイソクラテスやデモステネス等々まで、〝人びとに喜ばれるように語る〟のはレトリックに固有の欠点だと指摘している。プラトンは、こうした概念を裏返して〝神々に喜ばれるように語りかつ行為する〟と語っている。これは、『法律』で〝万物の尺度は人間でなくて神〟と語られたのと軌を一にしている。かれはまた、プロタゴラスやソフィストたちの〝相対主義〟をその世界観の背景にもったレトリックに代えて、〝永遠の善〟を基準とした弁論術という新たな理想を据えてもいる。

⑦③ 『パイドロス』二七四C以下.

⑦④ 『パイドロス』二七五A.

⑦⑤ 『第7書簡』三四一C―D，三四四D―E.

⑦⑥ 『パイドロス』二七五E.

⑦⑦ 『パイドロス』二七六A.

⑦⑧ 『パイドロス』二七五D.

⑦⑨ 『パイドロス』二七六B.

⑧⓪ 『国家』四九八A以下.『テアイテトス』一八六C「時を経て、多くの汗と教育を重ねた結果、備わる資格を携えた者に、ようやく備わるのではないかね」.『パイドロス』二七三E「多大の汗を流すのでなければ」も参照のこと。

⑧① 『第七書簡』三四一C.

⑧② 『テアイテトス』一八六C「備わる資格を携えた者たち」、『第七書簡』三四一Eを参照のこと。こうした人たちは、わずかの指導のみで自分から認識を手にする力を備えている。

（本学文学部教授）